

2020年10月28日(水)

老球の細道571号

偉大なコーチ山崎先生の思い出〈PART・Ⅷ〉

会津バスケットボール協会 室井 富仁

生は偶然、死は必然、不幸は突然、幸福(運)は自然にやって来る。風邪が治った。

◆7月20日(月)夜

夜の部は男女合同でキャシー・ベネットとアシスタントコーチが今やときめく「バックラインディフェンス」というマンツーマンディフェンスを指導してくれた。コンセプトはボールマンをミドルに誘い込むことである。そのためワンボールアウェイのディナイディフェンスはオープンスタンスで守る。当時私が自チームで指導していたディフェンスはボールマンをベースラインの方へ追い出すコンセプトだった。しかし、チームスタイルは違っても、色々な戦術の考え方や練習ドリルなどはとても参考になった。

会津高校の選手たちは、コーチの指導に対して反応が早く、動きも理解度も素晴らしいと称賛された。選手が褒められることは、親が我が子を褒められることがごとく無上の喜びである。新しい発見とコーチングの自己反省で長い一日がようやく終わった。

◆7月21日(火)

ツアーも3日目に入り、生徒たちにも疲れが出てきた。睡眠不足、便秘、腹痛と環境の変化によるものが大部分。特にトイレにプライバシーがない(顔と足が丸見えのトイレ)せいか出るものも出ない。誰かが言っていたが、たくましく生きる人間の3条件①どこでも寝れる②何でも食べれる③どこでも大便を出せる、ウンチクのある言葉である。海外遠征はそんなことを鍛える絶好の場である。

午前中は男子が隣の高校の体育館でクリニック。昨夜とは違って体育館にはクーラーがないため非常に暑かった。しかし、アメリカの男子コーチ3人はそれ以上に熱かった。昨日のドリルの復習をしたが、選手を褒めるのが上手で、選手はノリノリで練習を消化した。

午後と同じ体育館でクリニックである。生徒のモチベーションを考慮してか競争的練習、ゲームライクドリルが多かった。休憩時に突然元NBA インディアナペイサーズの選手が現れダンクショータイムを見せてくれた。準備運動などしないで、いきなりダンクの嵐には度肝を抜かれた。プロは常在戦場、宮本武蔵は決闘の前にストレッチなどしない。

この「いきなりダンクショー」の後奇跡が起きた。このダンクに刺激を受けた3年生の金子君が会津高校史上初のダンクシュートをやってのけたのである。今シャレを飛ばすと「いきなりステーキ」となるのか。190cmあれば当然かもしれないが、入学時はリングにもタッチできなかったことを思うと「オー・マイ・ゴッド!」。これをきっかけに彼は飛躍した。[付記:帰国後金子君は神奈川県体に福島県代表で出場しベスト8の原動力となる。月刊バスケットボールにも注目選手として似顔絵で紹介された。大学でもインカレ出場、社会人になってもクラブチームで日本一になり輝かしいキャリアを誇った。極めつけは全日本クラブ選抜チームの一員となり、アメリカのクラブチームと東京武道館で試合をしている]〈続〉